

アラブ・日本人租界のドクター事情

岡本 文夫（元アラビア石油、元国務大臣政策担当秘書）

日本を離れること 1 万キロ。日本人オイルマンがサウディアラビア王国の原油生産現場で勤務する上で必須となる医療環境を軸としてドキュメントしてみよう。

筆者が現地駐在した通算 8 年間。約 130 人の日本人が常駐し操業に従事する中、病気で亡くなった同僚が 3 名。交通事故死が 2 名。開発権益更新の応援に来て頂いた通産省 K 部長も、交通事故で殉職された。如何に厳しい現場であったかを物語っています。

更に、湾岸戦争に先立つ湾岸危機と称する半年間は、サウディ政府の厳命により退避が許されず、「死にたくない！しかし逃げられない！」という過度の拘束性ストレスから、6 名が発癌。イラク軍の猛砲撃で殺された者は、幸いにしていなかったものの、日本での治療虚しく逝去した日本人従業員が 3 名いたことも悲しい事実です。

第 1 章 危篤体験

長い昏睡からうっすらとでも意識が戻ると、ひたすらの苦悶が待っていた。34 年の人生の中でも、未だかつて経験したこともない苦痛を少しでもやわらげるためには大声で唸るしかすべがなかった。

「ウウウッ！ ウウウ・・・」

『今、俺は何をしているんだ？ どこにいるんだ？』

体温が 40 度以下に下がると、混濁した意識に思考が蘇るものらしい。

『そうか。今、俺は病院のベッドに寝かされているに違いない』

日本を遥か離れたサウディアラビアとクウェイトの中立地帯に位置する原油生産基地カフジでの仕事と生活は、一言では尽せないほどの困難に起因するストレスを伴う。

まず、夏場の日中の屋外は、軽く 50 度 C を超える。真面目な日本人の勤労意識

からすれば、部下のアラブ人は思い通りに働いてくれない。怠業だと叱責すれば、逆襲してきたり、政府に直訴されて思いがけないところで手ひどい報復を受ける。

イスラーム以外の宗教は認められていない。宗教警察や秘密警察は私服の民族服デイスターシャを着て、外国人の行動をそ知らぬふりをしながら監視している。なかなか繋がらない日本への国際電話は、日本語を解する韓国人エージェントがかなりの頻度で盗聴している。

波状に重なる精神疲労を飲んで発散しようにもイスラームの厳格な宗教上の戒律から、酒も飲み屋もない社会である。ましてや、一緒に過ごしたい家族を呼び寄せるには、手続きに軽く半年以上も待たされる国柄だ。

稀代の事業家と異名をとった山下太郎が、当時の日本が国交関係を結んでいなかったサウディアラビアとクウェイトから石油開発利権を獲得して、アラビア石油が現地に進出してから二十年近くが経っていたが、異文化中の異文化に感じられる現地社会に心から馴染んでいる日本人はまずいなかった。

その週末、なかなか家族を呼ぶこともできないでいる寂しい社宅で、筆者は弟分である今村と日頃の鬱憤への愚痴を肴に、野郎だけの団欒を過ごしていた。筆者は原油出荷をつかさどる SHIPPING 担当のスタッフであり、今村は経理部員だ。三十歳代前半のふたりは、百三十人の日本人従業員の中では若手のグループに数えられており、格別に仲がよかった。

「あああ、美味しい日本食を食いたいなあ。エ、今村は何が食いたい？」

「それは何といっても、寿司ですね」

「今度、日本へ帰ったら、築地の江戸銀へ連れて行ってやるよ。あそこの寿司は天下一品なんだ」

目の前にありもしないご馳走の記憶を辿って、とん服剤としての満足を求める悲しいマスターベーションだ。

「今、岡本さんは何を食べたいですか？」

「俺はラーメンだなあ……。そうだ！ ラーメンを食いに行こう！」

突拍子もない発想に、今村は驚いた。

「エッ、 どうやってですか？」

サウディアラビアとクウェイトの国境の原油生産基地から南に 350 キロ。世界最大の産油会社サウディ・アラムコの本社があるアルコバールは、アメリカ人従業員とその家族が多数居住しており、外国人の人口が多い分だけ僻地のカ

フジなどとは比較にならないほど都市機能が充実している。

ふたりはまだ一度も行ったことない街だったが、中華料理店と韓国料理店が1軒ずつあると聞いていた。

「なあに！ まだ行ったことはないが、ひたすら南を目指して走ればいいんだ」

翌朝早めに、ふたりはラーメンを求めて、東京・名古屋間に相当する 350 キロの長駆ドライブを試みた。韓国の現代建設が大掛かりな国土インフラ整備事業を請け負って、片側三車線の高速道路網を整備する前の話だから、道だか砂漠だか解らないような悪路が延々と続いていた。交通量が少ないので、道路の上には体長1メートルほどの大型のトカゲ『ザップ』が炎天の下であちこちに日向ぼっこしており、自動車の接近を察知すると、足が短く鈍重そうな体型に似合わないスピードで周囲の巣穴に逃げ込んだ。

筆者の読みの通り、アルコールまでのドライブには5時間近くを要した。当時のアルコールは、高層建築など殆どない埃だらけの沙漠色をした街並みであったが、商店も多く着実な社会の営みを感じられた。

初めての訪問ではあったが、飲食店があるとすればこのあたりだろうという山勘は当たって、目的の1軒しかない中華料理店は簡単に見つけることができた。しかし、残念なことに中身は中華料理もどきでしかなかった。本物の中国人はおらず、コックもスタッフもフィリッピン人だ。『ラーメン』と言っても通じない。『拉麵』と字を書いても、なおさら解らない。『餃子』と言っても書いても同じことだ。

「メニューくらいないのか！」

大声を出す筆者に、ヨレヨレのメニューが示された。

「最初から、それを持って来いってんだよ！」

30行ばかり記載された品書きが、さらに怒りのタネだった。エビのチリソースを頼もうとしたが、それはできないと言う。

「それじゃ、何ができるんだ！」

ウェイターは5行ばかりの料理を指さした。

結局、青椒糸肉もどきを食べて、中華料理を食べたんだと自分を納得させるしかなかった。

問題は食事のあとの時間の過ごし方だった。

酷暑の地では、シエスタ（昼寝）の社会習慣がある。最も暑い時間帯はユックリ

休養して体力を維持しなければならない。午後1時から4時までは、すべての店や事務所はクローズされ街としての機能は完全に停止する。折角、街と呼べるところまで来たのだから、4時過ぎに商店が開くまで待つて土産物のウィンドウショッピングをして異国情緒くらい楽しみたいではないか。

実は、筆者の愛車シボレーは、新車であったにもかかわらず最初から空調の調子が悪かった。いかにも現地らしい話だ。米国メーカーの発展途上国向け輸出品は、品質管理がいい加減なのだ。

長駆ドライブの間に冷却ガスが抜けてしまったとみえて、アルコバールへ到着した時には完全に機能を喪失してしまっていた、空調をかけたところで、体温よりよっぽど高い外気温の熱風が噴き出すだけだった。

従って、夕方まで待機すべき場所は車中ではなくなった。ふたりは、道路の中央分離帯に植えた樹木の陰にはかない涼を求めて昼寝した。十年後には堂々たる緑地帯に育つエリアだが、当時はまだショボイ疎林でしかなかった。おまけに、過労が続いていた筆者の眠りは深かった。

『暑いッ！』

眠りから覚めた時、疎林の木陰は横に移動していた。

『何かが変だ！』

どこがどう苦しいと表現できないのだが、完全に体調が狂っていた。神経質な今村は、時々刻々移動する木影を追いかけて体をずらしていたのだが、眠りが深かった分だけ、筆者は気が付けば炎天下で大の字になって熟睡していたのだった。

「おい、今村。何か体調がおかしい。急いでカフジへ帰ろう」

すべてを兄貴分にゆだね切っている今村は、帰路の運転も不調を訴える筆者に任せて、50度以上もある車内で膝を抱えて丸くなり、辛うじて外気よりは低い自分の体温を守っていた。

渴きを覚えた筆者は、炭酸飲料缶のプルトップを開けたのだが、これが事態をますます悪くした。ブシュ！という大きな音とともに、お湯のように温められていた甘いベトベトの液体が噴出し、フロントガラスの内側を汚して前方の視野を著しく阻害した。

ほうほうの体で原油生産基地まで戻ったものの、ふだんは大食漢の筆者なのに、臨時の夕食にしたインスタントラーメンは半分も食べられなかった。

苦しい時は寝るしかないと、早々にベッドに入ったが、あまりの胸苦しさのために深夜に目が覚めた。

『苦しいっ！』

時計は午前4時を指していた。耐えきれない程の苦痛ではあったが、まだ筆者には理性が残っていた。

『仲間を起こして、助けを呼ぶにはまだ早すぎて迷惑だ』

こみ上げる苦痛に耐えながら、午前6時まで我慢して、一番親しい先輩に電話で助けを求めた。

「前田さん。何か体調がおかしい。助けてください」

「岡本ちゃん、早朝からどうしたんや？ それなら、すぐ行くわ」

筆者は、やっと玄関まで這って行ってドアの鍵を開けると、その場にうつ伏せに倒れて救助人の到着を待っていた。

ふだんは抜群の元気が売りの男のことだから、兄貴分はてっきり冗談だと思って、遊び半分で5歳の娘と一緒に連れてきていた。ドアの前に突っ伏した相手を発見して、前田の顔色が変わった。

「エエッ、どうした！ ちょっと待っててや。娘を家に置いて来るさかいにな」その瞬間、前田の脳裏には、悪性の伝染病がひらめいたに違いない。

戻ってきた前田は、自分より大柄な筆者を引きずって車に運び込むと、病院へと急行した。

会社は、石油開発利権協定に付随した条件のひとつである総合病院を開設していた。しかし、頼りにしたい日本人医師はひとりしかおらず、日本人看護師も多い時ですらふたりしかいなかった。世界にも稀な苛酷な僻地だから、赴任してくれる日本人医師はめったにいないはずがない。医科から言えば、時に内科医であったり、外科医や産婦人科医であったりするのだが、患者がいれば専門を問わず診療しなければならない。

それでも、エジプト人やパキスタン人まで入れれば、医師の数は二十数人もおり、一応総合病院のような体裁だけは整っていた。

しかし、医療の質はお話にならなかった。歯の痛みに耐えかねて、パキスタン人の歯科医にかかった患者は、日本でなら治療できたであろうものを、「これは抜くしかない」と断言され、ただちに抜歯された。しかも、哀れ！ 抜かれてしまったのは、抜かなければいけない隣の歯であった。

ある盲腸炎患者の事例は壮絶であった。執刀はエジプト人医師が行ったのだが、麻酔薬の投与基準が日本とはまったく違って多量なのだ。手術中の患者の手を

握り、パンパンと刺激を継続しながら、「オイッ、寝るなよ！寝たら最後だぞ！」と同僚は必死で患者をやり起こし続けた。意識を失うとそのまま永遠の眠りにつくことが憂慮されたからだ。

日中の病院は、女子供も含めたアラブ人で廊下が満員になる。日干しレンガで作った住居に比べ、院内は冷房が効いて心地よいからだ。従って、病院の中はいつも民族的体臭である羊の脂の匂いで満ち溢れていた。

担ぎ込まれた筆者は、喉の渇きを訴えた。

「み、水うう・・・」

前田が紙コップを持たせてくれたのだが、力が失せた筆者には十キロのダンベルを持たされたように感じられて、口元まで持ち上げられなかった。手を添えてもらったものの、飲みたくてたまらない水を嚥下する力は残っていなかった。何科のドクターか解らないが、宿直のパレスチナ人医師が駆け付けてくれて点滴の針が挿入された。

そこで、筆者は意識を失い、その後二日間の記憶は途絶えた。



おかもと・ふみお

1947年生まれ。アラビア石油勤務を経て、元国務大臣・村田吉隆衆院議員の政策担当秘書を務めた。2013年「小説湾岸戦争 男達の叙事詩」(財界研究所刊)を伊吹正彦のペンネームで出版。講道館柔道五段(クウェート国柔道連盟七段)。

To be continued